2019.6.27

大草

**井上円了が志したものとは**

＜はじめに＞

　「東洋大学百二十余年の歴史の中で、これほどの快挙が、これほどの喜びが、今までに一体あっただろうか。」これは、東洋大学の箱根駅伝優勝讃歌の一文である。東洋大学の歴史の中に、箱根駅伝優勝以上の快挙や喜びは本当になかったというのであろうか。この讃歌を見て井上円了先生は何と思うであろう。「哲学館の建学理念と少々異なるが優勝はめでたいこと、まあよいか」と笑い喜ばれるかも知れない。

＜円了の哲学・思想と哲学館建学の精神＞

　円了は、ギリシャ哲学を始め古今東西の諸哲学を学んだが、最終的には仏教哲学に最高の真理があり、仏教哲学が世界で一番優れているとの結論に達した。すなわち、円了は、相対（唯物論・多元論）と絶対（唯心論・一元論）の不一不二というところに究極の真理を見出したのである。これは相対と絶対とは同じでもないが、異なるものでもないことを意味している。すなわち、円了の哲学の核心は、「現象と本体の不一不二の思想（現象即実在のこと）」にあるといわれている。

　以上のような円了の哲学思想を基盤として、哲学館（東洋大学の前身）は創設された。その建学の精神は、哲学を身近なものとして日本全国に広め、自分で考え、自分で行動し、公に尽くす人材を育成し、地球社会の平和と発展に貢献することであった。円了は、「諸学の基礎は哲学にあり」と考え、哲学を万物の原理・原則を究明する根本学問と位置づけた。そして哲学には、真理を発見するための理論哲学とその応用として実生活に役立てる実際哲学があり、この両者が揃って初めて哲学の力が発揮されると考えた。

　円了は、仏教を深く研究し、己を捨ててひたすら他者のために働くという利他行の実践以外に人生の意味はないとまでいっている。これは、世界の哲学と宗教を学んだ結果、利他行にこそ人生の意味があると最終的に円了が覚った真理であった。これはまさしく困っている人を救う菩薩の境地であり、円了は菩薩行を実践した人物でもあった。

＜円了の教育理念＞

　円了は、教育とは、知識や技術を身につけるための方法と、その知識と技術を正しい方向に活用するための知恵を身につけさせるものであると考えていた。それも教えるのではなく、自ら考え、自ら修得することに重点を置いた。また、学生には自分の感性を磨き人間性を高めていくことや高潔な人格の持ち主になることを求め、地球社会の平和や発展に貢献する実践行動を期待したのである。

　円了は、三回の長期の海外視察旅行で見聞を広め、よいところを我国に取り入れようとした。この外遊により円了が感銘を受けたのは、どの国も自国の学問・言語・歴史・宗教等の伝統を重んじ、「独立の精神」を有していることであった。このことから、円了は、日本の行き過ぎた欧化主義に警鐘を鳴らし、まず日本の学問・芸術を講究し、次に東洋哲学を主とし、西洋哲学を従とする方針をとった。そして、学力の養成だけでなく、人徳も同時に養成する必要性を説いた。さらに、日本主義（日本固有の学術を尊重する立場）と宇宙主義（客観的真理・哲理を尊重する立場）との調和を説いた。また、時代の変化に応じ、外国に出て活躍できる人材の育成にも力を注いだ。これらの円了の教育理念は以下のように整理されている。

①哲学教育を基本とする　②東洋及び日本伝統の諸学を重んじる　③西洋の諸学に学ぶ　④知徳兼全の人材を育成する　⑤独立自活の精神を実現する　⑥実力の養成強化をはかる　⑦哲学の応用と実用性を重んじる　⑧国際化に対応する　⑨自由開発主義を旨とする　　⑩教育者等の教育を重視する

　円了のつくったこれらの理念は現代社会においても色あせることがない。時代の変化に応じてこの理念を実用化することが大切である。

＜私の学んだこと＞

私は、定年退職後に仏教を学ぶことを通じて、自分を磨き人格を高めるよう努力してきた。しかし、円了の哲学と思想に触れて、社会にそれを役立てなければ意味がないことに気が付いた。高齢者がどのように社会に役立つことができるのか、今後の私の研究課題にしたいと思う。

＜おわりに・・・公への奉仕する心＞

　今日の日本において最も不足していることは、円了が最も必要と感じていた哲学の通俗化と、公に奉仕する精神であると私は思う。日本は豊かになったといわれているが、国民は自分の生活に汲々として幸せだと感じていない。これは国民が、哲学を学ばず、己を捨てて公に奉仕する精神のないことに起因していると私は思う。円了は、「何人も利他のため尽瘁（じんすい）せよ」と唱道している。年齢に関わらず何歳になっても社会に少しでも貢献できることがあるなら、それを実践していくことが自らの幸福にも繋がるものと私は信じる。

以上